

崖の上で踊る

石持浅海

第三回

第二章 キーパーソンの死

絵麻えまと雨森あめもりは、動けなかった。

身体からだだけではない。視線もまた、一点から動かすことができない。彼らの目は、ただひたすら一橋いちばしに向けられていた。

株式会社フウジンブレードへの復讐ふくしゅうのため、絵麻たちは同社の保養所に潜入して、拠点とした。ターゲットの一人である笛木ふえきの殺害に成功し、これ以上ないスタートダッシュに成功したはずだった。それなのに、目の前の光景は、なんだ？

復讐メンバーの一人、笛木殺害の功労者である一橋がテーブルに

突っ伏している。それはいい。彼は計画に従って眠剤を飲み、食堂のテーブルで眠った。絵麻たちの目の前でのことであり、メンバー全員が納得ずくだった。気持ちよさそうに眠る一橋をそっとしておいて、自分たちは自室で休憩した。

しかし、再集合時刻直前になって、変化が生じた。いったん解散を決めたときには、なかったもの。一橋の首から生はえている、アイスピックの柄え。

いきなり空気が動いて、絵麻の身体が震えた。隣に立っていた雨森が動いたのだ。慌てるでもなく、おそろおそろでもなく。意志の力で制御された歩みだった。震えたおかげで筋肉が動き、金縛りかなしばが解けた絵麻も、ついていく。二十歩程度の距離を移動して、一橋の背後に立った。

「一橋さん」

雨森が呼びかけた。反応はない。手を伸ばし、肩を叩こうとする手が、止まる。

一橋は動かなかった。違和感を覚えるほどの、完全なる静止。生者には決してできないことだ。その一点だけで、絵麻は一橋がすでに死亡していることを確信した。

ふうっ、と雨森が息を吐いた。絵麻に顔を向ける。

「アイスピック、かな」

肩を叩こうとしていた手が、一橋の首の後ろを指し示している。

「そうみたいね」

ようやく声を出すことができた。確かにアイスピックの柄に見える。見覚えはないけれど、ここは保養所の食堂だ。隣には、キッチンがある。キッチンにアイスピックがあっても不思議はない。

「よく知らないけど」雨森が手を引つ込めた。「首の後ろ、後頭部の付け根辺りには、急所があるって聞いたことがある。尖ったもので刺すと、即死すると」

「そう」

返事をしたけれど、意味があるものではないと、自分でもわかっている。しかし他に答えようがない。頭が回っていない。

一橋が死んでいる。それはわかる。死因が首に刺さったアイスピックなのも。しかしわかっているのは現象だけだ。一橋の死が何を意味するのか、自分がどんな行動を取ればいいのか、まったくわからない。

肩を叩かれ、また身体が震える。雨森は至近距離から絵麻の目を見つめた。「みんなを呼ぼう」

「あ……」

ぱん、と頭をはたかれた気がした。同時に思考力が戻ってきた。そうだ。仲間に変変が起こった以上、みんなを呼ばなければ。

一橋から離れ、食堂の出入口まで移動する。すると廊下から人の声が聞こえた。反射的に視線を巡らせて時計を探す。食堂の奥に掛け時計があった。午後六時二十七分。部屋を出るときに、集合時刻の午後六時半まであと八分と思ったから、二十二分だ。あれから五分しか経っていないのか。もう、ずいぶん前のことに思える。

廊下に出ると、吉崎と亜麻音、それに沙月がこちらに向かっていった。雨森が彼らに手を振った。

「来てくれっ！」

吉崎が怪訝な顔をした。しかし真剣な表情から、感じるものがあったのだろう。小走りにこちらまでやってきた。二人の女性も続く。

「どうした？」

吉崎の問いかけに、雨森は食堂の中を指し示すことで答えた。

「見てくれ」

吉崎が出入口から食堂の中を覗きこむ。中には、テーブルに突っ伏した一橋ただ一人。

異状を感じ取れなかったのか、吉崎が雨森に顔を向けた。「どうかしたか？」

雨森は答えず、食堂の中に入った。一橋に向かって歩いていく。吉崎も続く。数歩歩いたところで、息を呑む音が聞こえた。吉崎の足が止まる。

「あれ、は……?」

一瞬の自失の後、吉崎がダッシュした。一気に一橋の元に辿り着く。亜麻音と沙月も同様だ。先ほどの絵麻たちと同様、背後から一橋を見下ろす。

たつぷり五秒間は静止していただろうか。一橋と違って、生者にしかできない揺らぎや震えを伴った静止の後、吉崎は顔を上げた。再び雨森に顔を向けた。

「なんだ? これは」

「わからない」雨森は首を振る。「僕たちが食堂に下りてきたときには、もうこうなっていた」

ぬうと唸^{うな}って、吉崎が黙り込んだ。

傍^{かたわ}らの亜麻音は表情を変えていないが、強張^{こわば}っているのがわかる。元々大きな目がまん丸になっている。大きな口はしっかりと結ばれ、ややエラの張った顎^{あご}が震えるのがわかった。

沙月は両手で顔を覆っていた。しかし目までは隠しておらず、一橋の後ろ姿に注がれている。見ないよう目を両手で隠したのではなく、叫びだそうとするのを抑える仕草に見えた。

沈黙は長く続かなかった。廊下から、また話し声が聞こえてきたからだ。一人だけ出入口に残っていた絵麻が、廊下を確認する。瞳^{ひとみ}と千里^{ちさと}が並んでこちらに向かっていた。聞こえたのは、瞳の甲高い

声だ。その背後には江角と菊野の姿も見えた。

瞳が絵麻に気づいて顔を上げた。

「あら。みんな、もう揃ってる？」

確かに、この四人が加われれば全員揃ったことになる。絵麻は曖昧にうなずいて、食堂の中を指さした。それでも意味がわからなかったようだ。のほほんとした顔で出入口に到着し、中を覗きこむ。そこでようやく、尋常ならざる雰囲気気づいたようだ。

真っ先に駆けだしたのは、千里だった。この四人の中だと、千里のフットワークが最も軽い。つられるように、残る三人も走りだす。吉崎の重苦しい表情が迎えた。新たに加わった仲間のために、吉崎たちが場所を空けてやる。入れ替わる形で一橋の背後に立った千里たちは、同様の反応をした。一見すると静かな、それでも深刻な驚愕。

千里が目を見開いて、一橋を凝視した。「一橋さん……」

返事があるわけもない。千里が救いを求めるように、周囲を見回した。雨森が首を振る。

「ムダだ。一橋さんは、もう死んでる」

ひゅっ、と高い音が聞こえた。瞳が息を吸いこんだ音だ。一緒に唾液が入ってしまったのか、激しくむせた。

「死んでる……」

咳きこんで涙目になった瞳が復唱する。「どういうこと?」

「わからない」 雨森は吉崎のときと同じ答え方をした。

「死んでるって」 江角が唾を飲もうとした。しかし口の中がからからに乾いているのか、うまくいかずに苦しげな顔をした。「どうして?」

吉崎が頭を振った。「こつちが聞きたい」

菊野の顔面が蒼白になった。

「けっ、警察っ!」

おそらくは、この世で最も真つ当な反応なのだろう。しかし返ってきたのは、冷たい沈黙だった。数瞬すうしゆんの目配せ。

——誰が説明してあげる?

暗黙のやりとりがなされ、リーダー格の吉崎が代表して口を開いた。

「警察は、呼べないよ」そして天井てんじやうを指さす。「菊野さん。俺たちは今、何をしているんだ? 二階には、何がある?」

「二階?」 菊野は吉崎の指先につられるように天井を見た。二階にあるものは——。

菊野はうつむいた。「そうか……」

「そう」 吉崎はかんで含めるように続ける。「俺たちは、復讐の真つ最中だ。二階には、笛木の死体がある。俺たちの、犯罪の証拠が。」

捕まりたくないのなら、警察を呼ぶことは、絶対にできない」

「捕まってたまるもんか」江角が吐き捨てるように言った。「どうして、あいつらを殺したことで、逮捕されなきゃいけないんだ」

「そうだね」雨森が静かな声で言った。「僕たちは冷静になる必要がある。コーヒーでも淹れよう——いや、缶コーヒーでも買ってこよう。みんなは、どうする？」

「そうだな」吉崎もうなずいた。「賛成だ。確か、玄関ロビーに自動販売機があったな」

スラックスの尻ポケットに手を当てる。財布の存在を確認する仕事草だ。「財布を持ってきてない人は、貸すよ」

意義を唱えるものがおらず、全員が玄関ロビーに移動することになった。

「硬貨に、指紋を残さないでくれよ。我々がここに潜入した痕跡は、こんせき全て消しておかなければならないんだから」

言いながら、吉崎は硬貨をいちいちハンカチで拭いて投入した。

全員が同じことをくり返して、飲み物を手に食堂に戻った。

「手伝ってくれないか」

食堂に入るなり、雨森が言った。缶コーヒーを脇の下に挟み、テーブルの縁に手をかける。またテーブルを複数つなげて、全員が囲める場所を作りたいのだろう。先ほどまでは、食堂の奥にテーブル

を四つつなげて、全員が座れるようにしていた。しかしその場所は、今は一人の死者が占領している。察した仲間たちが協力し合って、出入口付近にまたテーブルを四つつなげた。

当然のように、窓を背にした中央に吉崎が座った。隣には亜麻音。自然と同じ席順になる。絵麻は廊下側の左端。出入口を背にする場所だ。

吉崎が缶コーヒーを開栓した。小容量のブラックコーヒーだ。全員が做^{なら}う。絵麻が買ったのは、ペットボトルに入ったミルクティー。ホットでないのが残念だけれど、ないよりずっといい。キャップを開けて中身を飲む。ほのかな甘さに、精神が少し安堵^{あんど}する。

しばらくの間、誰もが無言だった。ただ飲むことに集中しているように見える。まるで、他の仲間がいないかのように。やがてブラックコーヒーを飲み終わったらしい吉崎が、缶をテーブルに置いた。軽い音を立てて、空き缶がテーブル面に接地する。

吉崎はテーブルを囲んだメンバーをゆっくりと見回した。それから首をねじって、動かなくなっただも一人のメンバーに視線をやる。しかしすぐに首を戻した。

「一橋さんが、死んだ」

重い声で切り出した。痙攣^{けいれん}したように、菊野の顔が引きつる。吉崎は若い仲間の反応を無視して続けた。

「まず、根本的なところから始めよう。一橋さんは、どうして死んだんだろう」

「首のアレじゃないの？」

瞳が答える。アレとは、アイスピックのことだろう。吉崎はうなずいた。

「そうだろうな。柄の形からして、アイスピックだと思う。問題は、どうやって刺さったか、だ」

「あの場所に、自分で刺せるかということだね」

雨森が補足する。アイスピックを握る形にした右手を、首の後ろに持っていく。小指の付け根を、後頭部に当てた。

「角度的には、できないことはないな。でも、アイスピックの先は、それほど鋭くない。あくまで氷を砕くものであって、刺す目的で開発されたものじゃないから。針ならともかく、アイスピックだと、深く刺すにはけっこうな力が必要と思う」

全員が雨森と同じ動作をした。思い思いにうなずく。うなずいたということは、雨森の意見に同意したということだ。言外に匂わせた、口に出したくない結論に。

それでも、誰かが口にしなければならぬ。絵麻は、自ら口にした。偏頭痛が治まっている今なら、その勇気が持てる。

「誰かが、一橋さんを刺したってことね」

雨森が大きく息を吐いた。

「そういうこと。つまり、一橋さんは、殺された」

食堂の空気が固まった。

誰もがわかつているのだ。この場で殺人が起こることの意味を。駆け引きのような視線のやりとりの後、あきらめたように吉崎が口を開いた。

「俺たちが来たとき、保養所は施錠せじょうされていた。笛木のIDカードで鍵を開けて入ったんだから。そして笛木は、もう死んでいる。建物にいたのは、俺たちだけだ」

「ちよつと待った」

間髪かんはつ入れずに雨森が言った。

「確認すべきだと思う。今現在、この保養所は本当に施錠させているのかということと、本当に他に誰もいないのかということを」

「えっ？」江角が戸惑った声を上げた。「どうということ？」

「結論づけるのは早いってことね」代わって沙月が答えた。「この保養所に、本当にわたしたちしかいないのか。それを確認しないことには、話ができない。わたしも、そう思う」

「そうだな」吉崎がぼんと手を打った。「手分けして、中を確認しよう。二人ひと組で、いや、三人ひと組で三組作って」

「三人組」瞳が繰り返す。「どう分ける？」

「じゃんけんでも、くじ引きでも」吉崎は答えた。「とにかく、誰の意図も入らないようにしよう」

雨森が立ち上がり、音もなくキッチンに向かった。一分もかけずに戻ってくる。その手には、爪楊枝のバックが握られていた。

「これを使おう」

バックから九本の爪楊枝を取り出し、胸ポケットのボールペンで印をつけた。一本線を三本に、二本線を三本に、三本線を三本に。印をつけた方を手に持ち、わからないように混ぜた。

「引いて」

仲間たちに差し出す。最初に吉崎、続いて亜麻音が引いた。後は席順に左回りに引いていった。

一本線が、江角、雨森、千里。

二本線が、吉崎、瞳、沙月。

三本線が、菊野、亜麻音、そして絵麻。

「俺たちは、二階の空き部屋を調べよう」

吉崎が言った。空き部屋とは、笛木の死体がある十二号室と、その隣の十一号室だ。

「じゃあ、僕たちは共有スペースを調べるよ。大浴場とか、倉庫とか」

雨森が江角と千里を見た。勝手に決めただけで、いいかという確

認の視線。二人はそれぞれにうなずいた。

「では、わたしたちは玄関や勝手口、窓の施錠を調べます」

亜麻音が言い、役割分担は決まった。

「玄関から確認しましょう」

亜麻音がつつけんどんに言って、出入口に向かう。そこに、雨森から声がかかった。

「亜麻音さん、玄関ドアを確認したら、戻ってきて勝手口を見てくれないか」

亜麻音が足を止めて振り返る。わずかに眉間にしわが寄っていた。みけん発言の意図がわからない、といった顔。雨森が補足した。

「君たちが玄関を確認している間に、誰かが勝手口から出入りするかもしれない。人の出入りは、やっぱり窓よりドアの可能性が高いからね。だから僕たちが、キッチンで勝手口を見張ってるよ。玄関ドアの施錠を確認できたら、戻ってきてほしい。僕たちは、それから共有スペースを調べる」

なるほど。慎重に慎重を期するわけだ。そう納得しかけたけれど、違和感を覚えた。何か考えたら、すぐに見つかった。

「雨森さん。それなら雨森さんたちが勝手口の錠を調べたらいいんじゃないの？」

自分でも真つ当な意見だと思う。しかし雨森は薄く笑った。

「役割分担は大切だ。君たちが調べてこそ、意味がある」

そういうものか。判断がつかかねた。それでも亜麻音は「わかりました」と返事をして、廊下に出た。慌ててついていく。廊下の窓の鍵を確認しながら玄関に向かう。玄関ドアは、しっかりと施錠されていた。あらためて食堂に戻り、キッチンに移動する。一橋の姿は見えないようにした。

「玄関の鍵は、締まっていました」

亜麻音が簡単に報告し、勝手口に向かう。勝手口のドアはサムターン錠式だった。ここもまた、施錠されていた。

「オーケー」雨森が言った。「じゃあ、僕たちも行動に移ろう」

雨森は江角と千里を伴って、キッチンを出ていった。絵麻たちはキッチンの窓の施錠も確認して、食堂に戻った。食堂の窓も調べる。やはり、全ての窓に鍵がかかっていた。

次は二階だ。二階の廊下は左右に部屋があるから、窓は階段を上った手前の突き当たりだけだ。もう片方の奥側には、非常階段に続くドアがある。普段はドアノブにプラスチックのケースがはまっていて、緊急時のみ使用するドアだ。つまり、廊下の両端を調べれば、自分たちの役割は終わる。事実、あっという間に終わった。階段を下りようとしたら、奥の十一号室から吉崎たちが出てきた。あちらの仕事も終わったらしい。

六人で食堂に戻って数分待っていたら、雨森たちも戻ってきた。あらためて、生者全員でテーブルを囲む。

「共有スペースには、誰もいなかった。倉庫も風呂場も、人が出入りできる大きさの窓はなかった」

雨森が口火を切った。吉崎が続く。

「十一号室と十二号室にも、誰もいなかった。笛木は浴槽に浸かっただけだった。少なくとも、笛木が生き返って一橋さんに仕返ししたわけじゃなさそうだ」

悪趣味な科白だ。しかし当人は至って真面目な顔をしていた。

「外に通じるドアと窓は、すべて施錠されていました」

亜麻音が宣言するように言って、すぐに口を閉ざした。

空気が重くなった。それぞれの報告が正しいのなら、やはりこの保養所には、自分たちしかないことになる。

仲間たちの顔をそっと見る。一様に重苦しい顔をしているけれど、驚愕の表情は一つもなかった。

みんな、わかっていたのだ。そんなことは、調べるまでもないと。それでも雨森は検証の必要を訴えたのだし、全員がそれに賛同した。当然だ。お互いがお互いを疑い合って険悪になった後で、実は勝手口が開いていて出入りし放題だったなんてわかったら、間抜け以外の何物でもない。

「確實じゃない」雨森がテーブルに視線を落としたまま言った。「窓と勝手口はともかく、玄関ドアの鍵は社員のIDカードで開けられる。事実、僕たちは笛木のカードで入ったわけだし。フウジンブレードの社員が、こっそり出入りしている可能性は否定できない」

自分でも信じていない口調なのは、明らかだった。だから誰も反応しなかった。やや間を置いて、吉崎が口を開いた。

「そうだな。でも、今のところは無視していいだろう。雨森さん。認めよう。ここには、俺たち以外、誰もいない。一橋さんをあんな姿にしたのは、俺たちの中の誰かだと」

「ちよっと待ってくれ」

菊野が遮った。「吉崎さんたちが調べたのは、十一号室と十二号室だけだろう。みんなが泊まっている部屋は確認していない。そこに誰かが隠れているかもしれないじゃないか」

「客室はオートロックだよ」

瞳が低い声で言った。「わたしたちは十一号室と十二号室に入るために、管理人室から合鍵を取っていったんだ。つまり合鍵はそこにあっただってこと。誰かさんが持っていったわけじゃない」

「そ——」一瞬たじろいだ菊野は、それでも反論するだけの元気があつたようだ。

「それじゃあ、誰かが自分から部屋に入れたのかもしれない」

「この中の誰かがかくまってるって？」

今度は江角が答えた。「じゃあ、そいつは共犯だな。この中の誰かがやったのと、意味は同じだ」

「……………」

菊野はまだ反論しようとしたけれど、ネタが尽きたようだ。口をぱくぱくするだけだった。

菊野の気持ちは、わからないではない。頭ではわかっているけど、認めたくないのだ。こうやって顔をつきあわせている誰かが、一橋を殺したということ。

しかし事実だ。フウジンブレードの社員が玄関ドアから侵入した可能性を指摘した雨森だって、それはわかっている。その理由を、絵麻は口にした。

「雨森さん、さつき缶コーヒーを買いに行く前に、コーヒーを淹れようって言いかけたでしょ。それを止めて、缶コーヒーと言いつつ直した」

雨森は動揺しなかった。「ああ、そうだね」

「あれって、この中の誰かが一橋さんをあんなふうにしたって考えてたからでしょ？ コーヒーを淹れるのが犯人だったら、毒でも入れられるかもしれない。だから、安全な缶コーヒーを選んだ」

雨森は指先で頬を搔いた。「そのとおりだよ」

絵麻は、今度は吉崎の方を向いた。

「吉崎さんが二人一組じゃなく三人一組を提案したのも、同じ理由だよ。二人一組だと、誰かが犯人と二人きりになる危険性があった。だから三人一組にした」

「正解」答える吉崎の表情は、少し楽しげだった。「もちろん、犯人が一人とは限らない。それでも三人一組の方がリスクは下がる。

そう考えたのは事実だよ。絵麻さん、冴えてるね」

「偏頭痛がなければ、この程度のことにはわかるよ」

そう。頭は回る。けれどそれは精神状態が平常のときに限るはずだ。いきなり仲間の死体を見せられたといった状況で、パニックも起こさずに冷静にものを考えられている自分が不思議だった。

やはり笛木殺害が、精神に影響を及ぼしているのだろうか。自ら手にかけてたわけではなくても、共犯としてその場に立ち会った。死体製造に手を貸した経験が、別の死体を発見したときに活かされたのかもしれない。

「そういうことだよ」

吉崎があらためて言った。「一橋さんが食堂で眠っていることは、みんなわかっていた。休憩時間には、みんな自分の部屋にこもっていることも。抵抗されず、誰にも邪魔されずに一橋さんを殺すこと

は、十分に可能だ。抵抗されないんだから、誰にだってできる。腕力は必要ない。アイスピックの先端を首筋に当てて、そのまま体重をかければ刺せる」

「でも、そんな」千里が顔を上げた。必死な表情で訴える。「一橋さんは、仲間だよ。一橋さんの力がなければ、わたしたちの計画は成立しなかった。それくらい大切な仲間。それなのに、殺したっていいの？」

「でも、事実だ」切り捨てるように、吉崎が答える。「この保養所には我々しかいないし、一橋さんは殺された。よって、我々のうちの誰かが、一橋さんを殺した。そんな結論になる。仲間うんぬん云々の問題じゃない」

「……………」

千里は黙り込んだ。彼女も菊野と同じだ。一橋殺しの犯人がこの場にいると、認めたくないのだ。菊野は外部犯人説に逃げ場を求め、千里は仲間という絆きずなにすがろうとした。おそらくは、無意味であるとわかっていながら。

それでも千里は視線を落とさなかった。顔を上げたまま、他のメンバーを一人一人見た。みんなは、仲間が仲間を殺したという考えを認めるのかと。

最初に目が合ったのは、絵麻だった。絵麻は目を逸そらして言った。

「認めるしか、ないと思う」

千里の目が見開かれた。絵麻の隣、雨森にコメントを求める。雨森は小さく首を振った。「他に犯人がいたら、いいんだけど」

メンバーは、次々に千里の期待を裏切ってみせた。同じように身内犯人説を支持しないはずの菊野でさえ。千里は、ここではつきりと肩を落とした。「そんな……」

「千里さん」吉崎が静かに語りかけた。「入口で立ち止まっちゃいけない。我々は、その先を考えなけりゃならないんだから」

千里がゆつくりとした動作で顔を上げる。「その、先……？」
「そう」吉崎は周囲をぐるりと見回した。

「一橋さんが、ここにいる仲間の誰かに殺された。それは、認めないといけない。どうやったかもわかっている。だったら次に考えるべきなのは、『誰が』『なぜ』殺したかだ」

ぎゅっと空気が締まった気がした。

もちろん、絵麻もそれがテーマになると考えていた。ただし、答えは見つかっていない。仮説すらも。唯一確実なのは、自分じゃないということだけだ。

そつと視線を巡らせる。絵麻は、四つつながて長くしたテーブルの、廊下側左端にいる。自分の左側、短辺の席には雨森がいる。自分の対面、窓側の右端には沙月が座っていて、そこから垂麻音、吉

崎、江角という順序だ。雨森の対面になる短辺は空席。本来なら、一橋が座るべき場所だからだ。また廊下側に戻って、千里、瞳が座り、絵麻の右隣に菊野がいる。彼ら一人一人を順に視線で捉えながら、絵麻は妙な実感の欠如けつじょを感じていた。

このメンバーの誰かが、一橋を殺した。それは理解できる。菊野のような反射的な否定も、千里のような情に溺おぼれた否定も、自分には湧き起こらなかった。

犯行の情景だって、思い浮かべることができる。たとえば、吉崎。眠る笛木の手首を切ったこの男なら、眠る一橋の首筋にアイスピックを突き立てる光景は、容易に想像できる。他のメンバーもそうだ。吉崎で想像した光景の、人物部分だけを入れ替えればいい。それで犯行現場の完成だ。

そこまでわかっていながら、この中の誰かが犯人だという実感が湧かない。なぜだろう。考えようとした瞬間、菊野の声が思考を破った。

「俺じゃない」菊野の声は甲高かった。「俺は休憩時間中、ずっと部屋にいたんだ」

「わたしもだよ」菊野の右隣に座る瞳が言った。しかしその顔は菊野の方を向いていない。瞳は場の全員を等分に見て、続けた。

「休憩時間に、部屋を出た人、手を挙げてーっ」

どこからも、手は挙がらなかった。瞳は息子のような菊野を見た。
「こういうことだよ」

菊野の顔が、また引きつった。吉崎が苦笑する。

「一応、訊いておこうか。誰か、自分が一橋さんを殺したと、名乗り出る人はいないかな？」

返事はなかった。元々期待していなかっただろう吉崎は、自分に向かってするように、ひとつうなずいた。

「とりあえず犯人は、自分がやったということを、隠しておきたいらしい」

至極真つ当な科白だ。積極的に自らの犯行を喋りたがる犯人など、いるはずがない——そう考えかけた絵麻の脳に、触れるものがあった。なんだ？

——ああ、そうか。

絵麻は、先ほどから抱いていた実感の欠如の正体に、気づいていた。自分たちは、みな共犯なのだ。

保養所の十二号室で、自分たちは笛木を殺害した。その場になかった一橋を含めて、全員が共犯だ。それもそのはず、笛木をはじめとするターゲットを殺害することを目的として集まったメンバーなのだから。

そう。自分たちは笛木殺しの共犯だ。同じ罪を共有している。それなのに、メンバーの誰かが共犯仲間に内緒で、もうひとつの殺人を犯してしまった。しかも犯人は、そのことを申告していない。共有と秘匿ひとく。全く相反する二つの概念が並立しているからこそ、自分
は実感を抱けずにいるのだ。

しかし、絵麻と同じ考えでないメンバーも存在する。少なくとも、
亜麻音はその一人だ。吉崎の発言を受けて、双眸そうまうに異様な光をみ
ぎらせた。

「犯人が犯行を隠すのは当然だと思えます」まずは絵麻が考えたこ
とと同じ内容で切り出した。

「では、どうやって暴けばいいのでしょうか」

犯人に対する、宣戦布告に聞こえた。また空気が締まる。亜麻音
が犯人に向けた刃は、犯人でない他のメンバーをも緊張させる。い
くら犯人以外は斬るつもりはないと言われても、刃の鋭利さに、無
実の人間も尻込みしてしまうからだ。

「ちょっと待って」

雨森が掌を正面に向けて、発言した。話を止められた亜麻音が、
怒りの表情を雨森に向ける。自分の発言を邪魔することは、すなわ
ち吉崎の発言を否定することと考えたのだろうか。

残念ながら、亜麻音の想像どおりだった。雨森は穏やかな表情を

崩さぬまま、言葉をつないだ。

「亜麻音さんは、暴くと言った」そう言う雨森の顔は、穏やかで真剣だった。「吉崎さんは、次に考えるべきのは、一橋さんを『誰が』『なぜ』殺したかだと言った。でも、真っ先に考えるべきなのは、そんなことなんだろうか」

亜麻音は、今度ははっきりと両眼に怒りの炎を燃え上がらせた。

「違うとでも？」

「違う」

雨森は明確に否定した。彼には珍しいくらい、断定口調の否定。

「誰が一橋さんを殺したか。なぜ一橋さんを殺したか。仲間が死んだんだから、考えなければならぬのは確かだ。でも、今すぐじゃない。今この瞬間に考えなければならないのは、一橋さんの死が、僕たちの作戦に与える影響だ」

「あ……」

珍しく、吉崎が口をぽかんと開けた。完全に虚を突かれた表情だ。

もつとも、絵麻に吉崎を嗤う資格はない。なぜなら絵麻もまた、口をぽかんと開けているからだ。テーブルの周りに、同じ顔をしていない人間は、一人しかいなかった。仲間にこんな顔をさせた人物。

雨森は仲間たちの表情に頓着することなく、話を進めた。

「僕たちは、なんのために集まっているのか。中道と西山、そして

笛木を殺すためだろう。笛木殺しには成功した。計画では明後日の朝には、中道と西山を殺さなければならない。そんな中で、一橋さんが殺されてしまった。僕たちのうちの、誰かに」

雨森は缶コーヒーを取り、残っていたコーヒーを飲み干した。

「みんな、どうする？ 非常事態発生のため、計画を延期するのかな。それとも計画どおりに中道と西山を殺すのか。どちらを選ぶ？」

雨森が口を閉ざすと、沈黙が訪れた。ただし、先ほどまでの重苦しい沈黙ではない。メンバーたちの表情がそれを物語っている。おそらくは、誰もが絵麻が感じたような実感の欠如を感じていたのだろう。どこかふわふわとした、地に足が付いていない感覚。それが雨森の言葉によって、現実を引き戻された。自分たちがここに集まった理由を思い出し、頭が実務家に戻った。みんな、そんな顔をしていた。

「続けるに、決まっている」

真っ先に答えたのは、江角だった。「息子の仇は、絶対^{かたき}に取る」

「そうね」瞳が続いた。「この機会を逃すわけにはいかない」

「そうだよ」菊野が唇を尖らせた。「笛木を殺したのに、中道が生きているなんて、あり得ない」

「フウジンブレードに恨みを持っているのは、みんなだ」吉崎はそんなことを言った。「みんなが作戦を続行すると決めるのなら、俺

は今までもどおり手伝うよ」

「はい」 亜麻音の回答はシンプルだった。先ほどまで雨森に向けていた怒りを自覚しているのか、この女子大生にしては気恥ずかしそうにしている。

雨森が絵麻を見た。その目が「どうする？」と訊いている。絵麻の答えは決まっていた。

「続けるべきだと思う。わたしたちは、もう一步を踏み出してしまった。ゴールデンウィークが明けたら、笛木が死んでいることが、ばれてしまう。警察だって乗り出してくるでしょうし、中道と西山も警戒するようになる。瞳さんが言ったように、この機会を逃すと、たぶん永遠に殺せなくなる」

雨森はひとつうなずくと、千里に視線を投げた。千里はゆるゆると頭を振った。

「ごめん。今は考えられない。でも、一橋さんが死んだことで、フウジンブレードへの憎しみが消えたわけじゃないのは確か」

要は、作戦続行に賛成するということだ。

「よし」 雨森がぼんと手を打った。「じゃあ、僕たちは計画どおり、フウジンブレードへの復讐を執行する。それでいいね」

進むべき道は、決まった。

〈つづく〉